

Title	ヒトとモノ・カミをめぐるネットワーク：福岡県篠栗新四国霊場を中心として
Sub Title	
Author	Lamotte, Charlotte
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.76 (2013.) ,p.144- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成24年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000076-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Schaffer, M., 1994, *The Soundscape*, Vermont, Destiny Books.

Thibaud, J. P., 2008, "La Méthode des parcours commentés" 「説明された旅程」, in Grosjean, M., *L'Espace urbain en méthodes* 『都市空間の調査』 Marseille, Éditions Parenthèses, pp. 79-99.

Tixier, N., 2001, *Morphodynamique des ambiances construites* 『都市の中のアンビエンスの動的形態』 Nantes University.

ヒトとモノ・カミをめぐるネットワーク： 福岡県篠栗新四国霊場を中心として

ラモット・シャルロット

本研究は福岡県糟屋郡篠栗町に関して宗教人類学の立場から考察した。篠栗には四国遍路を模倣して成立した新四国霊場があり、天保6年（1835）に篠栗に立寄った遊行尼僧の慈忍によって創始されたと伝えられている。新四国霊場は本四国と同様に、八十八ヶ所の札所があるだけでなく、番外の新しい札所も多い。篠栗には沢山の寺院や神社、小祠・小堂があり、巡礼札所が狭い地域に点在して、濃密な宗教文化に満たされた地域社会である。宗教的職能者の動きも活発で、小祠・小堂には巡礼者だけでなく、僧侶や神職、行者や霊能者が複雑に関与する。一方、札所で一番の賑わいを見せる南蔵院（真言宗）には東洋一の涅槃佛があり沢山の参拝者が訪れるだけでなく、観光客も多い。篠栗では田舎と都会、宗教と商業、神と仏が混淆している。篠栗は外部社会と恒常的な交流を維持しつつ変化しているのである。篠栗の札所をめぐる巡礼は、現在でも毎年十数万に達し、幅広い出身地の人々が加わって、様々な類型を示している。新四国霊場は創設時から現在まで多様な変遷を見せ、地域社会の社会経済の発展に大きな寄与をしてきたことは間違いない。こうした背景の中で、篠栗でのヒト・モノ・カミの独自のネットワークを考察することが本研究の課題であった。

2012年度には調査を二回行った。参拝者が多い春は3月30日から4月8日まで行った。30日は遍路宿で調査の計画を立て、3月31日は篠栗の信者と一緒に札所巡りを始め、来音寺で行事に参加・聞き取りをした。12番・85番に参拝し、55番札所では堂守に聞き取り、以前のデータを確認した。4月1日は養老の滝で滝行見学、行者さんの聞き取り、大日寺にて聞き取り、2日は延命寺の団体と一緒に札所巡り、3日は札所巡り、金剛頂院にて聞き取り、香山観音堂、79番札所にて聞き取り、4日見性寺にて聞き取り、5日札所巡り、遍路団体の聞き取り、6日札所巡り、遍路団体の聞き取り、7日下町の大師講とともにお接待、8日帰京の日程であった。夏は7月10日から18日まで調査をした。10日経比寿屋、大日寺の聞き取り、11日見性寺の施餓鬼法要見学と聞き取り、12日成榮寺施餓鬼法要見学と聞き取り、13日西林寺施餓鬼法要見学と聞き取り、14・15日は札所巡り、16・17日は宮崎県西都市在住で篠栗で活動する霊能者のお宅を訪問、といった内容であった。

2012年度の調査は人とモノの関係性を明らかにすることを目的とした。成果として、“La pierre qui change: Vie et mort des statues à Sasaguri, Fukuoka”（変化する石—福岡県篠栗における生と死）と題する論文を執筆し、*Cahiers d'Extrême-Asie* 22（2013年刊行予定）に収録される予定で、トゥールーズ大学に提出する博士論文の一部に利用する。内容は様々な意味を持つ仏像の研究である。札所の堂守

は、境内やお堂内部の仏像を、日々、面倒を見る。仏像は信者や参拝者に服を着せられ、水を浴びせられ、供物を捧げられている。こうした、数多くの仏像の扱いを課題にした民俗学的研究は決して多くはない。そこには仏像を「生きたもの」、と考える興味深い観念が見られるので、習慣・語り・行為を検討し、「仏像とは何か」という問いを立てて検討した。仏像だけでなく石像・木像などの信仰対象となる事例も検討した。妊娠祈願をする番外札所の人形、神社で祀られている石、自然現象としての岩や木など、全てが魂を持っていると考えられ、人間によって祀られる。カミとホトケの区別は曖昧である。仏像の魂とは何だろうかと考えて、製作過程を検討した。石の中に仏を見ることができるといふ石屋によって、石が選ばれ掘り出される段階から、開眼式を通じて信者の崇拜対象になるまでの過程を通じて、仏像は益々力を得ていくと考えられている。自然そのものの力、祈禱の専門家である僧侶の力、さらに祈願や希望の願をかけて日々仏像を祀る信者の力など、全てが仏像の中に籠められ、力の源となっていく。このような観点から、仏像と人間の関係を考察の中心に据え、仏像の新たな意味を考えた。これはヒト・モノ・カミ・ホトケの関係性の研究でもある。

今後の研究の課題の第一は民間信仰の動態や宗教的職能者の動向に注目することである。篠栗の新四国霊場は、本来は地元の本四国へ行けない人のために創設された。長い間、農業や山林業で生活してきた地元の人々は、札所のお砂踏みによって本四国の利益を受けると信じた。現在でも札所の御札や奉納品を見ると、昔の生活の様々な心配や悩みごと、あるいは希望がよく理解できる。しかし、時代が変わると人間の願ひも変わる。篠栗で活動する宗教的職能者は現在では現代社会に適応した祈願を願う。最近では、福岡のような大きな都会ではスピリチュアルな相談が流行っている。誰にも言うことができない心配事や悩みを持つ人々が増え、霊能者に訪れる人が少なくない。これは現代の特徴と見られるかもしれないが、こうした形態は歴史的にも長く継続し、多くの宗教的職能者がその担い手であった。民間信仰では、修験の役割が大きいが、僧侶、盲僧、巫者もあり、半僧半俗の祈禱師が活躍し、流動的に地域社会のウチとソトを往来し、宗教世界を活性化してきた。特に篠栗では新四国霊場の成立以後、様々な外部世界とのチャンネルが生まれ、時代の変化に応じて宗教性を変容しつつ維持してきた。定期的に訪れる講集団との交流も地域社会のウチとソトの連関を活性化させた。小規模で密度の高い霊場は、常に動態的な状況を維持する場として凝集性を発揮してうまく機能した。一番札所の南蔵院が高野山の権威を背景として、卓越した指導力を発揮して、時代に対応し、善くも悪くも、全体を統合する役割を果たしたことの意味も大きい。現在でも、多様な宗教的職能者は、「霊能者」や「拝み屋さま」などと呼ばれて地域社会に根付いている。また、「行者」と言われる人々もいて、本人自身は靈感がないと考えていても、信者がついていなくても「修行」を行う人々として活動している。ただし、時には「靈感」を得るための修行も行うので、霊能者になる可能性もある。篠栗では「拝み屋さん」と「行者」の区別ははっきりしていない。

研究の第二の課題として、小さい町ではあるが時代に対応して巧みに地域社会での生活を維持してきた篠栗の変化の動態を詳細に見ていくことである。霊場形成の初期には、札所の堂守は農家などの在家の人々が主体になって運営してきた。世代が変わると共に次第に宗教的職能者がその担い手となってきた。次の世代になると得度させて僧侶とし、寺院に変わっていく札所もある。堂守にはソトから移り住んできた者も多い。ソトから来た遊行宗教者（行者・修験・巫女）が、篠栗に定着して自分のお堂を建てたり、札所の管理人となって活動を継続してきた。最近では、福岡市の発展で篠栗はベッドタウンとなって団地が増え、普通の町と同じようになってしまった。しかし、減少傾向にあるとしても、巡礼者、

参拝者、修行者、堂守、僧侶、巫女などのウチとソトとの頻繁な交流と往来は継続しており、神仏混淆の信仰の世界に止まらず、観光開発や癒しブーム、パワースポットなど姿を変えた宗教性が広く浸透し独自の地域社会を形成している。

以上のような二つの課題、宗教的職能者と地域社会に関して、ウチとソトの動態を中心にして、篠栗での調査を更に継続して研究していく予定である。

海洋空間をめぐるグローバル・ガバナンスの形成過程における 当事者参加の可能性

宇 田 川 飛 鳥

1. 研究の目的と対象

本研究の目的は地球環境問題の深刻化を社会的背景として、海洋空間の利用と管理をめぐる交渉の場における当事者参加の可能性を文化人類学的視点から模索するものである。地球の環境悪化は深刻であり、国際社会において自然資源に対する平和的な管理と利用のための共有方法の構築は、急務の最重要課題であると言えよう。共有の方法と共通理解の具体的枠組みは、国際条約において定められる。国際条約とは、国家を越えて利害調整をおこない関係諸国が主体となって共通の環境ガバナンスを形成する試みによって生まれるものである。では、関係諸国の合意のもとで決定された国際条約は、現状に対して最も正しい答えを提示しているのだろうか。

本研究では、まず「グローバル（国際性）」と「ユニバーサル（普遍性）」を峻別する。グローバルであることは、ある一時代の一状況において、最も力をもつイデオロギーに過ぎない。一方、ユニバーサルとは時間や空間を越えた性質をもつ。現在、世界中に浸透している自然に対する「サステナビリティ（持続可能性）」や「バイオダイバシティ（生物多様性）」を強調した管理や利用はグローバルであるかもしれないが、ユニバーサルであるかについては議論の余地がある。本研究は文化人類学的立場からこのように一見、普遍性を持つかのように見える理念に対し、これが社会的構築物であることを明らかにしていくものである。本研究における、現実社会への見方について、ブルーノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論 [1999 (1987); 2008 (1991) など] から発想を得たことを述べておかなければならない。ラトゥールは一見、絶対的の真実に見える「科学的真実」が、科学者の具体的な日常の諸事情—研究費の獲得、論文の作成、製薬会社とのやり取り—や実験の作業手順や実験室の環境、時代による要請や流行の中で「誕生」していることを実験室における具体的な調査から明らかにした。「科学的発見」は私たちの目前に届けられた時には、それは何度も繰り返し使用され踏み固められた「真実」となっている。私たちは文化的概念に関する複数性については了承しているものの、科学的知見の複数性については意識していない。文化人類学においても自然環境に向き合う人間の認識の多様性は明らかにされてきたが、その分析の前提には認識は多様であっても実在としては「唯一の自然」が設定されてきた。ラトゥールによれば、近代と呼ばれてきた時代（とその作業）は認識と実在、文化と自然を二分化してきたように見えて、実はそのハイブリッドを生み出し続けているに過ぎないのである。本研究は、ラ